

沖縄伝統音楽の演奏と「沖縄イメージ」の複数性について

——非沖縄出身者の唄三線の事例から——

拓殖大学（非常勤講師） 桃塚 薫

1. 目的

本発表の目的は、非沖縄出身者が沖縄伝統音楽（唄三線）の演奏を通じて自らが持つ「沖縄イメージ」を複数なものに変容させていく過程を明らかにすることである。

1990年代以降主にマスメディアを通じて生み出された青い海や癒しという「沖縄イメージ」は、沖縄というひとまとまりの地域の特性を際立たせてきた。とはいうものの、沖縄本島の人々は離島に癒しの「沖縄イメージ」を持ち、沖縄の人々の間には複数の異なる「沖縄イメージ」が対立しながら併存する状況がある（多田, 2008）。先行研究によれば、沖縄からの移民やその子孫が生活する日本の内地や海外の諸地域では、沖縄の伝統芸能はその地域に根差した数ある芸能の1つとして受容されている（城田, 2010 など）。しかし、伝統芸能を通じて沖縄の外においても形作られると想定される複数の「沖縄イメージ」については、社会学的研究が活発に行われているとはいえない。

そこで、本発表においては、東京に在住する非沖縄出身者が、沖縄伝統音楽に密接にかかわりあうことにより、どのような複数の「沖縄イメージ」をもつことになるのかに着目する。

2. 方法

本研究では、プロの唄三線奏者に入門して趣味として沖縄音楽を演奏する東京在住の複数の非沖縄出身者に参与観察とインタビューを実施する。彼らは、自ら楽器を購入して沖縄音楽を学んでおり、沖縄出身ではないが沖縄に対する関心は相対的に高いと考えられる。彼らが当初持つ「沖縄イメージ」は、唄三線の習得に伴いどのように複数に分化していくのか、その過程をとらえる。

3. 結論

予備的調査において明らかになったのは以下の点である。調査対象者の多くは当初1つの漠然とした「沖縄イメージ」を持っていたが、唄三線の習得の過程で、これが無効化されていく。楽曲や演奏方法の中に現れる本島と離島の歴史や文化の違いによって、複数の相反する「沖縄イメージ」がせめぎあうようになる。さらに、唄三線の演奏がクラシックのような他のジャンルの演奏との異同の中で分析的にとらえられることによって、これらの複数の「沖縄イメージ」は沖縄固有のものであるだけでなく他の文化の「イメージ」に接続される。

文献

城田 愛, 2010, 「踊りと音楽にみる移民と先住民たちの文化交渉の動き 多文化社会ハワイにおけるオキナワン・アイデンティティ創出の揺らぎ」, 石原 昌英 編, 『沖縄・ハワイ コンタクト・ゾーンとしての島嶼』, 97-126.

多田 治, 2008, 『沖縄イメージを旅する 柳田國男から移住ブームまで』, 中央公論新社.